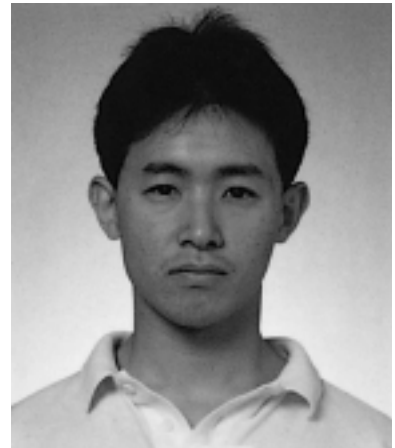


# 私にとってのモンゴル ボランティアツアー



本分会 岩本 益幸  
(環・第1設計室)

## ■■■ はじめに ■■■

出発前のモンゴルに対する印象は、遊牧民族の国、遺伝的に日本人に最も近い人種であるという以外に、これといった知識はありませんでした。事前にツアーの主催するモンゴル語教室にも何回か通ったのですが、日本人にとっては同じアジアにあり距離的にも近いにも関わらず、アメリカなどに比べ遠い存在に感じられていました。

今回はモンゴルの大自然を体験するとともに、子供達とのふれあいを通してモンゴルという国の実際の姿を、見てきたまま感じてきたままに報告したいと思います。

## ■■■ モンゴルの大自然 ■■■

モンゴルの自然は素晴らしいというより、すごいといったほうが適当だと思います。南ゴビでは、ほとんど起伏のない見渡す限りの草原で、思わず走ったり大声で叫びたくなるほどでした。訪問していたゲルからすこし離れるまで実際に5分ほど走ってみると、草原のまったく中で声も聞こえず本当に風の音だけが耳に入ってくる不思議な状態で、何か自分が自然と一体になった感じがしました。

また、日が沈むときもたいへん素晴らしい光景でした。西の地平線に日が沈むとき東の空は

地面に近い方から夜、夕方、昼が層を成しているのがわかります。やはり地球は丸かったのだと改めて感じることができました。

夜になると夕暮れ時とはまた違う意味で感動がありました。トイレに行き、なにげなく空を見上げると、満天の星空が広がっていました。早速、寝ているみんなを起こして肌寒い中、地面に寝転がり時がたつのも忘れて星空を眺めました。これほどじっくり星を眺めたのは中学2年の氷ノ山林間学舎以来だと思います。

今回訪問した8月は、モンゴルで最も過ごしやすい季節ですが、冬になると最低気温の平均がマイナス40にもなるらしく、本当のモンゴルの自然を語るには冬を経験する必要があるように思います。そして、厳しい冬を知ったときにモンゴルに対してまた違った見方ができるのだと思います。

## ■■■ モンゴルの子供達とのふれあい ■■■

今回、実際にマンホールに暮らす子供達と会うことはできませんでしたが、以前はマンホールに住み今は赤十字の施設で暮らしている子供達と接することができました。私たちが彼らの施設を訪ねたとき全員が出迎えてくれましたが、みんな一見、健康的で服装も汚れたものをまとっている子供はいませんでした。彼らは、歌や踊りなどを披露して歓迎してくれ、彼らの

きらきらした瞳で見つめられて私は理由もなくうれしくなっていました。

ここに暮らす子供達は、大変に人なつっこく明るい性格の持ち主ですが、体の方は痩せていて、特に何人かの小さい子供達は、よく見ると栄養失調でおなかが出ていました。私はあくらかいた自分の脚の上に子供を抱え、その細い体を自分自身の体で感じた時、本当に心から彼らに幸せになってほしいと思いました。

子供達との交流が終わり最後のお別れの時に、初めに施設の紹介パンフレットを私に配ってくれた女の子が寂しそうにさよならを言いに来たので、今年の正月に実家に帰ったときに親にもらったお守りを彼女の手渡し、通訳がその場にいなかったため日本語で「このお守りをもっておきなさい」と言いました。その言葉の意味を彼女が理解できるとは思ってはいませんが、私の心は通じたのではないかと思います。

#### ■■■ モンゴルの人達との交流 ■■■

私たちがゲルや赤十字を訪問したとき、斜に構えたり、いぶかしげな顔をして私たちを迎えたりする人は少なかったような気がします。そのような態度で迎えられることに慣れていない私の方がとまどいました。普通の日本人の感覚では見知らぬ人が近づいてくると警戒するのが常識だと思うし、逆に見知らぬ人に自分から近づくようなことは普通ないと思います。しかし、今回のツアーは現地の人と交流することに主眼がおかれているのでそうも言っておれず、いろんな人と身振り手振りで話をするようになります。

言葉の通じない見知らぬいろんな人としゃべっていると不思議なもので、そのうちにこれからしゃべろうとする人に対して自分自身のガードがなくなり、知らない人がちょっとした知り合いのように思えてくるのです。ですから、日本に帰ってくると以前はちょっと苦手な人にて

も声をかけやすくなった気がします。

気軽に声をかけるといえば、こんなことがありました。私たちが空港のロビーで飛行機を待っていたとき、私はロビーの外に出ようと近くの自動ドア近づいたのですがドアが開かない。仕方ないので手であけようとする、横にいた見知らぬおじさんが「そのドアは動かないよ。向こうに行けば開くドアがあるから。」と言ったかどうかはわかりませんが身振り手振りで教えてくれました。私は思わず「ありがとう」と日本語でお礼を言いました。ちょっとした一声で何か気分が楽になりました。最近、自分の周りではこんなことはなかったような気がします。

#### ■■■ おわりに ■■■

今回、このツアーに参加するにあたり、初めての海外への渡航であり、現地に着いて「いったい何ができるのだろうか」と不安になりました。実際にモンゴルでは、赤十字の施設に暮らす子供達との交流を行いました。それがボランティアなのかどうかは正直言ってわかりません。ただ、モンゴルの子供達と本気になって一緒に遊んだことは、彼らにとって一生心に残る交流だったと思うし、私が彼らから得たものは多く非常に価値のある体験だったのではないかと思います。

今回のツアーに参加して一番に感じたことは、「子供達のために何かしたい」「自分ができることは何だろう」ということでした。きっと、何かしたいと思う気持ちと何かしようと起こす行動そのものがボランティアであり、人それぞれに違った形や関わり方があるのだと思います。

最後になりましたが、職場組合員のみなさんのご協力でこのような貴重な体験ができましたことを、この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

以上